

ギaskell書簡に見られるナイチンゲール

長瀬久子

I

才能と包容力を兼備する人の常として、Elizabeth Gaskellは多くの友人をもち、そのなかには同時代の代表的知識人や作家も少なくなかった。しかし彼女が特に強い関心を示した相手はやはり女性だった。George Eliot、Charlotte Brontë、Florence Nightingale等の同時代の非凡な女性に対する彼女の好奇心や興味の強烈さは、ギaskellの書簡の行間からも立ち上がってくるようで、女性の性格や人生への、小説家らしい根強い興味が偲ばれる。ギaskellは時代のヒロインとして世に知られる直前のナイチンゲールと、たまたま数日とともに過ごす機会をもった。この時にナイチンゲールについて記した彼女の書簡は、家庭におけるナイチンゲールを知る貴重な資料というにとどまらず、作家の観察力と表現力が生んだ優れたキャラクター・スケッチとなっている。同時にこれらの書簡は、ナイチンゲールについて書くギaskell自身についても自ずと多くを語っている。ナイチンゲールとの、さほど深まることのなかった交友関係と、彼女についてのギaskellの言説は、そこにギaskell自身が看取される意味でも興味深い。本稿では主として書簡に拠りながらギaskellのナイチンゲール観を検証し、家庭、家族についてのふたりの観念を比較しつつ、この対照的な2人の女性の特性を考察したい。

II

ギaskellは1854年10月上旬から同月28日までの約3週間の間、Derbyshireにある、ナイチンゲール家の館Lea Hurst荘に滞在した。この時彼女は*North and South*の後半を執筆中で、思うように筆が進まず、静かに書ける環境を求めていた彼女にフロレンスの両親が場所を提供したのであった。ちょうどフロレンス

が帰省しており、17日火曜日に彼女が出立するまでのおそらく10日足らずを、ギヤスケルは彼女と同じ屋根の下で親しく語り合う機会をもった。

1854年という時期はナイチンゲールの生涯でも大きな転換期だった。17歳で、我に仕えよという神の召命の声を聞いた彼女はこの年34歳。彼女が天命と思いつめた看護に従事する希望に執拗に反対し、上流婦人の無為の生活を強要する家族との確執のなかで、20歳代のナイチンゲールが狂気の瀬戸際に追い詰められ、鬱や錯乱状態に陥った時期から5年が過ぎたのみであった。しかし、彼女は確執のなかで、10年間独力で病院、衛生、統計関係の資料の収集研究に励み、各国の専門家に名を知られるまでになっていた。前年来、貧しい家庭教師のためのサナトリウム、「淑女病院 (the Institution for the Sick Gentlewomen in Distressed Circumstances)」の監督として看護活動を開始しており、その夏のコレラの流行時には Middlesex Hospital に出向、看護に奮闘した直後であった。

ギヤスケルとともに過ごした数日間は、ナイチンゲールの生涯における最も劇的な転換点にあたっていた。彼女の名を不滅のものにする Crimea 戦争は開始から半年が過ぎ、9月21日の Alma 高地の襲撃は一応成功していた。しかし英軍の人的被害は甚大で、Bosphorus 海峡沿岸の村 Scutari に急造された英陸軍病院には続々と傷病兵やコレラ患者が送還されていた。しかも、陸軍の不手際による医師や物資の極度の欠乏から、病院内でも輸送船上でも、兵士は酸鼻を極めた不潔、悲惨のなかに放置されていた。この事態が Times 紙上に暴露されたのは、ギヤスケルがリー・ハーストに到着直後であったと思われる10月9日のことであった。特派員報告は12、13両日も続き、世論は怒りで騒然とした。民間では傷病兵救済のために急遽「タイムズ基金」が設立された。戦時大臣 Sidney Herbert も直ちに行動を起こした。その一環として彼は2日後の15日に、友人であるナイチンゲールに看護団を指揮して至急スクタリに向かうことを要請した。彼女が政府公認の英国陸軍病院看護要員総監督として、史上初の看護婦団を率いてロンドンを出発したのは1週間後の10月21日であった。ナイチンゲールの任命に世間は興奮に沸き返ったといわれる。彼女の母と姉の Parthe は、看護活動への希望を、つい先日まで長い年月妨害し続けたことも忘れて、興奮の渦に加わるために、ロンドンに駆けつけた。ギヤスケルはリー・ハーストに一人残って『北と南』を書き続けた。ギヤスケルはナイチンゲールの生涯で最も劇的な大転換の瞬間、

というのみならず、英国史上、少なくとも英国看護学史上まれに見る劇的な瞬間に、台風の日である館に居合わせたわけである。しかし、ナイチンゲール家の女性たちと異なり、フロレンスが名誉の地位を与えられたことでは、ギaskellの評価は変わらなかった。またこの後瞬く間に感動に満ちたナイチンゲール伝説を作り上げた英国社会もギaskell独自のナイチンゲール観に影響を与えていない。

ナイチンゲールの詳細な伝記が一度ならず出版された現在なお、彼女にはランプを掲げて病床の傍らにたたずむ聖女のような看護婦のイメージがまつわっている。現実の彼女は、若くしては、彼女が神の仕事として意識していた、看護活動を通じての自己実現に不可欠な教育訓練を渴望する女性であり、クリミアから帰国後は数十年に渡り、看護学校設立、病院設計、国内およびインド駐在英陸軍の衛生改革、さらにこれらの諸問題に関する膨大な著述に精力的に取り組んだ近代看護、衛生問題の改革者であった。1854年当時のギaskellにナイチンゲールのその後の広範囲な事業を予測すべくもない。しかし彼女は10日足らずの語らいの間に、ナイチンゲールの人間像を素朴だが的確に把握し、描写している。

III

リー・ハースト滞在の初期と最後の晩に、2週間の間隔を置いて、ギaskellはナイチンゲールの人となりと印象を、親友宛ての2通の書簡に書き記している。2週間の間にギaskellのなかでナイチンゲール像は大きく変化している。

看護を、神の仕事を遂行する方法として選択した女性の高度な宗教性をギaskellは感じたのだろう、ナイチンゲールについて語るギaskellの口吻には、同じ人間よりは何か奇跡を語るに似た趣が最初から感じられる。それだけにふたりの間には親近感のもととあまり感じられないのだが、当初の熱狂的な賛嘆は、2週間の間に、畏敬の念は変わらないものの、異質の存在への驚異と懐疑、押さえきれない疑問と批判へと変化している。

当初は、ギaskellの印象は感激に満ちていた。「ああ、Katie、あなたが彼女の外見だけでも見られればよいのに」と、第一報で彼女はCatherine Winkworthに呼びかけている。¹ この書簡で彼女が語るのは天使のようなナイチンゲール像である。清楚な容姿、優しい微笑、巧みな物まね、黒い絹の服に、頭を包む白い

ネット。これは歯痛を押さえる目的で顔を縛っているのだが、ギヤスケルの筆致では天使の光背の印象がある (*Letters*, p.306)。ナイチンゲール一家の談話のなかで報じる価値があると彼女が見なしたものは、館を抜け出しては村人の病床に付き添った少女時代の逸話 (*Letters*, p.306)、贅沢な衣装を、右から左に人に与えてしまった旅行中の逸話 (*Letters*, p.306) など、優しい無私の聖女の逸話である。

間もなく彼女はナイチンゲールが Ruth のような優しく自己犠牲的な天使ではないことに気付く。第一の書簡は 4 日間をかけて書かれているが、その間にもギヤスケルの語るナイチンゲールは、当初の茶目っ気と微笑の親しみやすい天使から、より近づき難い崇高な天使へと変質する。第一の書簡の後半部分からは、ギヤスケルが賛嘆と畏敬のうちにも、ナイチンゲールの人となりでどこか人間離れのした近寄り難さを感じ取っていたことが窺われる。次の引用に見られる現実味の希薄さは、この時点でギヤスケルの心が既に対象から離れ始めていたことを暗示している。少なくともここには親近感や共感は見当たらない。

She must be a creature of another race so high & mighty & angelic, doing things by impulse — or some divine inspiration & not by effort & struggle of will. But she sounds almost too holy to be talked about as a mere wonder. Miss [sic] Nightingale says — with tears in her eyes *alluding to Andersen* that they are ducks & have hatched a wild swan — she seems as completely led by God as Joan of Arc ... it makes one feel the livingness of God more than ever to think how strait He is sending his spirit down into her, as into the prophets & saints of old. (*Letters*, p.307)

このあまりにも崇高な白鳥の聖女像は、第二の書簡では、より一層非人間化し、峻厳孤高の聖女像へと変化している。

She has no friend — and she wants none. She stands perfectly alone, half-way between God and His creatures. (*Letters*, p.319)

第一の書簡がナイチンゲールの聖女性についてだとすれば、第二の書簡では、ギaskellの関心は、彼女の性格の特異性、その超人的な集中力と、他のいっさいに対する徹底した無関心の落差の激しさに向けられている。第一の書簡ではナイチンゲールの極度なひたむきさも、「家族は、彼女に旅行や何かさせて他のことに興味を向けさせようとしたけれど、一つの目的にしがみついたので。すって。(Letters, p.307)」と賛嘆を込めて語っている。大家族の主婦として生涯あらゆる家事上の雑事に注意を分散され、それを女性の不可避の生活として甘受したギaskellにとって、一目的に「しがみつ」く女性の存在は新鮮な驚異であったろう。しかし、このような一徹さが、反面、関心の対象外のものに対する冷徹な無関心を意味することを知らると驚異は懐疑に変わる。ギaskellは第二の書簡で、ナイチンゲールのこの側面を表す逸話を次々に披露しているが、次の逸話は慈愛と非情が表裏一体をなす特異な女性を描いて、短編小説のような効果をあげている。

She used to go a great deal among the villagers here, who dote upon her. One poor woman lost a boy seven years ago of white swelling in his knee, and F.N. went twice a day to dress it. . . . The mother speaks of F.N. — did to me only yesterday — as of a heavenly angel. Yet the father of this dead child — the husband of this poor woman — died last 5th of September, and I was witness to the extreme difficulty with which Parthe induced Florence to go and see this childless widow once while she was here.... She will not go among the villagers now because her heart and soul are absorbed by her hospital plans, and as she says she can only attend to one thing at once. (Letters, p.319-20)

しかし、ナイチンゲールの一事へのひたむきな専心が、足手まといな家族や家庭を放棄する様相を呈するとギaskellは単なる懐疑的観察者ではない。仕事のためには女性は子供を育児施設に預けるべきだと考えるナイチンゲールと、母性に対して時にはセンチメンタルなまでに思い入れの強いギaskellは「大喧嘩 (Letters, p.320)」をする。ナイチンゲールが何よりも仕事（神の仕事であっても）と、その実践の場である組織の人間であり、それを家族の絆にも優先させる

ことについてギヤスケルは「彼女は組織だの婦人団体だの団体に偏りすぎると思
います……これこそ彼女の唯一の欠点と思えます (Letters, p.319)」と批判して
いる。同じ第二の書簡でギヤスケルはナイチンゲールが人間を種全体として愛す
るが、個人としては愛さないというパースの観察に触れている。ギヤスケルには、
個人としての感情が基本であり、天職の成就の場である組織や施設に没頭する一
方で、そのためには家族の断絶も厭わないナイチンゲールの姿勢は「欠陥」で
ある。政府の任命を受けて上京するまで、ナイチンゲールがいっさいを家族に秘密
裏に運び、末娘の健康状態を気遣う彼等に一顧も与えずに出発し、家族が屈服し
て出発の準備に手を貸す場面を目撃したギヤスケルの同情は家族の側に寄せられ
ている。(Letters, p.319)

ナイチンゲールの立場から言えば、家族からの意図的断絶は彼女の天職への従
事を妨害する彼等との長い葛藤のなかで身についた最も合理的な身の処し方であ
らう。特にこのとき彼女の頭を占領していたものは数日後に差し迫った戦地にお
ける看護の指揮という未曾有の大問題であったに違いないので、ここに彼女の
冷酷さのみを見てはならない。しかし、ナイチンゲールが個々の人間を愛さない
一方、個人が基本であるギヤスケルには軍隊や病院という日常を超えた集団や組
織は、経験がないだけに、想像も同情も及ばない世界であった。Sylvia's Lovers
の稚拙な戦場描写を思い起こすまでもない。²

IV

ギヤスケルが一見素朴な方法で描出した、家庭を拒否する冷徹な組織人として
のナイチンゲール像は、同時代に流布し、その後 Lytton Strachey による偶像破
壊的な伝記³ の出現まで一般的であったナイチンゲール像と比較すると、ギヤ
スケルの観察の独自性が明瞭になる。Sir Edward Cook によれば、ナイチンゲ
ールの任命が公表された瞬間から彼女は国民的ヒロインとなった。⁴ 以後、幸福な
家庭生活をなげうち、愛の奉仕のために自己犠牲を厭わぬ聖女としてのナイチ
ンゲールのイメージが急速に形成される。彼女の名は報道や帰還兵を通じて広まり、
国民的ナイチンゲールブームが起り、自己犠牲の権化としてのナイチンゲール伝
説が定着した。ギヤスケル自身、1855年7月にパース宛の手紙で、マンチェス

ターの工員の間で娘にフロレンスと命名することが流行していると報告していることから、ブームが半年足らずの間に広まっていたことが分かる (*Letters*, p.359)。 *The Only and Unabridged Edition of the Life of Miss Nightingale: the Heroine of European Philanthropy* と称する、定価1ペニーの冊子が出版されたのは、内容から見て1855年10月以後らしいが、ステレオタイプのナイチンゲール像は、既にここに集約されている。この冊子では彼女の行為は「自己犠牲的な」、「献身的な」、「慰めの」などの形容辞付きで、すべて極めて‘feminine’な行為として紹介される。幼少時代から父の領地で貧しい人々に「自己否定的」⁵な善行を施した少女は、経営難の「淑女病院」に「自分の時間と財産 (p.7)」を捧げて「瀕死の身寄りのない女教師たちの枕辺に座って、最後の嘆きを慰 (p.7)」める。戦時大臣からの任命を受けた彼女は、「殉教者の精神 (p.12)」で、「神聖な奉仕のために娘を手放す」「同じくらい自己否定的な両親 (p.9)」を残して故国を後にする。兵舎病棟では昼夜を厭わず「愛の労働 (p.9)」に奉仕し、彼女の存在が「慰めとなり、支えとなる手術 (p.11)」に立会い「コレラや熱病で死んでいく男たちの傍らに何時間も立ち尽くし、力の限りその男の苦痛を和らげ、死が彼を手放すまではめったに立ち去らない (p.11)」のである。

ナイチンゲールは現場看護婦の労働も厭わなかったようだが、少女時代はともかく、成人後この問題を長期間熟慮研究した彼女が目指したものは個々の看護行為の実践よりも、病人の効果的治療を目的とした看護体制の組織化や非効率的な医療組織の改革だった。しかしこの冊子の筆者には、そのような組織や体制対女性という意識は皆無である。ナイチンゲールへの賛辞は一看護婦としての細やかな看護、それも技術ではなく言葉や慰めによる、精神的方面への奉仕に対して向けられている。

冊子はまたナイチンゲールの看護活動を、富裕な家庭の令嬢の私財を投じた慈善事業と混同している。「淑女病院」再建に私財を投じたという冊子の記述は事実に反する。また戦時大臣から要請を受けた彼女が「直ちに費用を計算し、出費にたじろがなかった (p.9)」と、あたかもスクタリでの活動も彼女の私財を基にした慈善事業であるかのような記述がある。クリミア戦での惨事は、トルコの複雑な関税法と英陸軍の煩雑な規則の狭間に落ちて、戦場や病院に必要な物資が届かなかったことが原因の一部であり、戦時中のナイチンゲールの功績のひとつは、

タイムズ社をはじめ各方面から彼女に委託された豊富な資金を立て替えて設備を増設し、必要物資を調達した事実であった。⁶ このような資金の流れひとつを例にとっても、ナイチンゲールの行動範囲は個人としてよりも、政府、陸軍、タイムズ社等の大小の組織と組織の代行者であるナイチンゲールというように、社会的な規模である場合が多かった。しかし冊子では、問題が一上流婦人の慈善活動という個人的水準に切り下げられている。

ナイチンゲールブームのなかで生まれた Longfellow の詩 'Santa Filomena' の一節 (Lo! In that house of misery / A lady with a lamp I see / Pass through the glimmering gloom, / And flit from room to room. / And slow, as in a dream of bliss, / The speechless sufferer turns to kiss / Her shadow....)⁷ が人口に膾炙した理由は人々が「ランプを掲げる淑女」に看護婦の理想像を見たためではない。戦いに傷つき横たわる男たちと、慈愛の象徴であるランプを掲げて無私の奉仕を捧げる女という関係に、産業革命を背景として成立したヴィクトリア朝社会は、家庭における男女の関係を見たはずである。兵舎病棟は家庭であり、兵士は産業社会での過酷な戦いに傷ついた男たち、聖なる癒し手は母であり、妻である。ここでも陸軍病院総婦長の功績は、家庭の女性の奉仕という 'feminine' なレベルに切り下げられ、矮小化されている。

1 ペニー冊子やロングフェローの詩を典型とする、同時代の嗜好が決して認めようとしなかった、組織とナイチンゲールという問題をギャスケルは素朴なやり方だがよく気付いている。ただ、彼女は、工場でも病院でも、家庭を離れて、組織の一員として働くことが女性の正しいあり方とは考えていなかった。看護婦の仕事が高く評価する点でギャスケルとナイチンゲールは共通するかに見える。しかしふたりの共通点はそこで終わる。ギャスケルはルースを、前述の冊子や詩に書かれたステレオタイプのナイチンゲール像そのままの看護婦、病院のなかにながら組織とは無縁の孤独な聖女として造型している。ルースは富者より貧者を優先する慰めと祈りの聖女であり、この作品では看護は治療や生よりも死と天国に直結する仕事である。⁸ 一方ナイチンゲールは看護に絶対不可欠な要素として、専門的訓練を受けた看護婦、組織された看護システム、病院の機械設備の充実をあげる強い組織指向の人である。⁹ 彼女はルースのような霊的存在としての看護婦を決して好んでいなかった。クリミアの戦地での看護を志願した「枕のし

わを伸ばしたり祈りを捧げたりはするが、便器の中身を空け」ることは決してしない「献身的な淑女たち」や、「病院より天国に向いて」おり「患者の魂を慰めはするが、汚れた体はほったらかし」という宗教団体出身の看護婦はナイチンゲールの大きな悩みの種だったと言われる。¹⁰

仕事のためには家族の感情をも犠牲にする非情な組織の人——ギヤスケルの描くナイチンゲール像はそこに多少とも利得の感覚が絡んでいれば、家族愛がないだけ Carson や Thornton のようなマンチェスターの工場主より一層非人間的な人物像となり得たかもしれない。しかしナイチンゲールの行為が純粋に利害を超越しているだけにギヤスケルは、「彼女のことで批評めいたことを言うなんて生意気にちがいない (Letters, p.320)」と、そこで判断を停止している。この判断の停止も、いかにもギヤスケルらしい。

V

前述の1ペニー冊子でも、また当時の他の報道記事でも、¹¹ ナイチンゲールの恵まれた家庭が強調されている。女性にとって幸福の絶対条件とされた家庭（しかもその条件を十分に備えた）さえ捨てて奉仕に赴く——ここでは女性の犠牲の大きさを示す指標として家庭が強調されている。しかし、幸福な家庭生活を犠牲にしての滅私奉仕はナイチンゲール自身の意識とは無縁であった。家庭ないし家族についての彼女の観念は随筆 *Cassandra* に明瞭に記されている。家族こそが彼女の考える女性の幸福即ち自己実現を阻む最大の要因であった。¹²

『カサンドラ』は、同時代の女性の置かれた立場の不当さについての抗議の形を取った断片的随筆で、ナイチンゲールが神の仕事の具体的な実践方法を模索して懊悩していた20歳代に執筆されたものと推定されている。ここで彼女は、子供の教育、慈善活動、社交、料理等、当時の社会が家庭の女性の神聖な使命、人生の喜びと見なしていた役割に激しく反発し、家庭という習慣性の機構が絶えず女性に強要するこれらの雑事が、女性の集中力や持続力、有意義な仕事の達成を不可能にすると抗議している。女性は Murillo のような天才に恵まれてもムリリョにはなれない。毎日3時間もナイフとフォークを動かすのでは、ペンや絵筆をもつ暇はない (*Cassandra*, p.210) という記述には家族によって無為の贅沢な生活

に束縛される若いナイチンゲールの怒りがこもっている。次の引用では家族は女性の自己実現を許さぬ、才能ある女性を圧死させる怪物的機構として意識されている。

The family uses people, *not* for what they are, nor for what they are intended to be, but for what it wants them for — for its own uses. It thinks of them not as what God has made them, but as the something which *it* has arranged that they shall be. If it wants some one to sit in the drawing-room... though that member may be destined for science, or for education, or for active superintendence, by God, i.e., by the gifts within. (*Cassandra*, p.216)

多年に渡るこのような無意味な家庭生活の結果、女性は小児化するか鬱気質になり果て、自我も意欲も退化し、矮小化する。家族の手によるこのような自我の破壊のプロセスを経て利他的な、‘feminine’な女性は形成されるとナイチンゲールは指摘する。

And family boasts that it has performed its mission well, in as far as it has enabled the individual to say, ‘I have no peculiar work ... nothing that I cannot throw up at once at anybody’s claim’; in as far, that is, as it has destroyed the individual life. (*Cassandra*, p.216)

家庭や家族が女性を抑圧することはギaskellもまた強く意識している。しかしそれはギaskellの場合、思考の直線的なナイチンゲールのように、自己実現の目的のために簡単に捨てられるものではない。幼児期の母の死によって最初の家庭を奪われて以来、この問題はおそらく彼女の全体験、全存在をかけて考え続け、作家生活を通じて書き続けた問題である。家庭は至福の場所でも地獄でもない。家族は女性の自我を抑圧するが、彼等から逃げたり孤立しては、幸福も自己実現もない。家族という問題に関して、ギaskellは時には聖書の記述にさえ疑問を投げかける。群集に説教中に訪れたマリアと弟たちについてイエスが、「わ

が母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ」と問うたという聖書の一節には違和感を感じるとギaskellは書簡で述べている (*Letters*, p.319)。「誰にても天にいますわが父の御心を行なうものは、即ちわが兄弟、わが姉妹、わが母なり」¹³ というイエスの言葉は、天意への服従を通じて他人を家族化する反面、家族の絆を無化する可能性を含み得る。そのあまりに峻厳な響きにギaskellは疑問を感じるのである。重態の娘の生命に執着する Holman 牧師の、「主は与え、主は奪い給う、主の御名のあがむべき」¹⁴ と唱えて娘の生命をあきらめることは、極限の時に至るまではできないという言葉はギaskell自身の意識を代弁している。

リー・ハーストでナイチンゲールに会う数年前、ギaskellは Lady Kay-Shuttleworth 宛ての書簡で、友人関係について、「私たちはぶつかり合い、真剣に意見を述べ合うことでお互いを強くするのだと思います。私たちがそうして邪魔しあうこと自体、お互いを刺激し、より健全にするのです (*Letters*, p.116)」と積極的に評価している。家族からも友人からも超然と孤高を保つナイチンゲールと対照的に、人と人がぶつかり合い邪魔になりあうことさえ人間の健全な成長には不可欠だというギaskellの信念は、友人関係、家族関係を問わず、彼女の人生と作品全体に通底している。

ギaskellとナイチンゲール——この対照的なふたりが、一瞬の触れ合いの後、離れていったのは不思議ではない。ギaskellはナイチンゲールの公的な活躍にはその後も注目し続け、ナイチンゲール基金設立に協力し (*Letters*, pp.382-83)、著書を興味深く読んでいるが (*Letters*, p.522)、私的な友情を育てようとはしなかったらしい。

注

1. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard ed., *The Letters of Mrs. Gaskell* (Manchester: Mandolin, 1997) p.305. 以下本書簡集からの引用は括弧内に *Letters* と略記し、ページ数を記す。
2. Elizabeth Gaskell, *Sylvia's Lovers* (1863; Oxford: Oxford UP, 1982) ch.38.
3. Lytton Strachey, 'Florence Nightingale' *Eminent Victorians* (1918; New York: Harcourt Brace Jovanovich) pp.135-203.
4. Sir Edward Cook, *The Life of Florence Nightingale* (London: Macmillan, 1914) pp.164-65.

5. Anonymous, *The Only and Unabridged Edition of the Life of Miss Nightingale: the Heroine of European Philanthropy* (London: Coulson, 出版年不詳)。以下本冊子からの引用は括弧内にページ数のみを記す。
6. Cecil Woodham-Smith, *Florence Nightingale 1820-1910* (London: Constable, 1951) chs.8, 9, 10.
7. Henry Wadsworth Longfellow, 'Santa Filomena' *The Complete Poetical Works of Henry Wadsworth Longfellow* (1863; Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1902) pp.242-43.
8. Elizabeth Gaskell, *Ruth* (1853; Oxford: Oxford UP, 1991) ch.33.
9. フロレンス・ナイチンゲール「救貧院病院における看護」、『ナイチンゲール著作集』第2巻(東京、現代社、1981) 3-45頁。
10. Cecil Woodham-Smith, p.145.
11. 一例をあげれば、1854年10月28日付 *Examiner* の 'Who is Mrs [sic] Nightingale' 682-83頁。
12. Florence Nightingale, 'Cassandra' *Cassandra and Other Selections from Suggestions for Thought* (London: Pickering & Chatto, 1991)。以下本作品よりの引用と関連箇所は、括弧内に作品名とページ数を記す。
13. 『新約聖書』「マルコ伝」第3章第31-34節。
14. Elizabeth Gaskell, 'Cousin Phillis' *Cousin Phillis and Other Tales* (Oxford: Oxford UP, 1991) pp.350-51.

Bibliography

1. Chapple, J.A.V. and Pollard, A. ed. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Mandolin, 1997.
2. Cook, Sir Edward. *The Life of Florence Nightingale*. London: Macmillan, 1914.
3. Gaskell, Elizabeth. 'Cousin Phillis' *Cousin Phillis and Other Tales*. Oxford: Oxford UP, 1991.
4. —, *Ruth*. 1853; Oxford: Oxford UP, 1991.
5. —, *Sylvia's Lovers*. 1863; Oxford: Oxford UP, 1982.
6. Longfellow, Henry Wadsworth, 'Santa Filomena' *The Complete Poetical Works of Henry Wadsworth Longfellow*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1902.
7. Nightingale, Florence, 'Cassandra' *Cassandra and Other Selections from*

Suggestions for Thought. London: Pickering & Chatto, 1991.

8. Strachey, Lytton, 'Florence Nightingale' *Eminent Victorians*. 1918; New York: Harcourt Brace Jovanovich.
9. Uglow, Jenny, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1994.
10. Woodham-Smith, Cecil, *Florence Nightingale 1820-1910*. London: Constable, 1951.
11. Anonymous. *The Only and Unabridged Edition of the Life of Miss Nightingale: the Heroine of European Philanthropy*. London: Coulson, 出版年不詳。
12. 'Who is Mrs [sic] Nightingale' *Examiner* 28 Oct. 1854.
13. ナイチンゲール、フロレンス、『ナイチンゲール著作集』全3巻。東京、現代社、1981年。